

大学での教育活動を通して日本民俗学の発展に深く関わった人物である。とくに「八月十五夜考」などに代表されるような「比較民俗学」の提唱は、民俗学者の中で異色とされている。

直江については、有馬真喜子のインタビュー記録「直江広治氏―筑波大学教授（ひと）」（一九七九年）⁽³⁾、北見俊夫の整理「直江広治先生と民俗学」（一九八二年）⁽⁴⁾などの先行研究があるが、いずれも直江の民俗学への貢献を、もっぱら戦後の研究や活動をもつて高く評価している。戦前の活動については、本人の回顧「あとがき―民俗学と私」（一九八七年六月）⁽⁵⁾、「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」（一九九四年）⁽⁶⁾などから一部窺うことができ、最近、鶴見太郎は柳田国男古稀記念会との関連で直江の活動の一部を取り上げている⁽⁷⁾。なお、直江の中国関係研究の多くは『中国の民俗学』（岩崎美術社、一九六七年）に収録されている。

本章では、以上の先行研究を参考にしながら、まず彼の民俗学や中国との出会い、日本民俗学確立期に受けた訓練を辿り、それから中国に赴いてからの様々な活動を検討し、日本民俗学にとってのそれらの活動の意味を考へる。

1 東洋史と民俗学

1 直江広治（なおえ・ひろじ）の略歴

一九一七年、青森県八戸市類家に生れる。東京府立三中（現両国高校）で正木助次郎の影響を受け、地理に興味を持つ。

一九三五年、東京高等師範学校文科第四部「地歴科」に入学する。自然地理から人文地理へ。佐々木彦一郎の研究に惹かれる。

一九三六年冬、「山の人生」で民俗学にふれ、これより柳田の著作を多く読む。

- 一九三七年、樺太に一人旅行中、盧溝橋事変を知り、衝撃をうける。
- 一九三八年、東京文理科大学史学科東洋史学専攻に進学し、有高巖、肥後和男に師事する。秋、同級生千葉徳爾と柳田宅を訪れ、以降出入りする。
- 一九三九年春、民間伝承の会に入会し、木曜会に出席する。一年後『民間伝承』に論文著作の紹介を書く。岐阜県で調査する。柳田の紹介で石田英一郎を訪ねる。
- 一九四一年七月、志願して北京の日本中学校の教師となり、中国人宅で下宿生活を送る。満鉄調査班の山本斌と知り合う。北京の日本民俗研究団体・民風会に参加する。
- 一九四二年、日本中学校を辞職する。五、六月、山西学術調査に参加し、風俗習慣の調査を担当する。九月、北京私立輔仁大学日本語文学部の新設に伴い、講師として赴任する。日本語、日本文学、日本民俗学を担当し、日本民俗学の普及に努める。
- 一九四五年七月、石田を次長とする西北研究所と泉靖一を中心とする京城帝大の蒙古草原調査に参加するが、ソ連の対日宣戦で調査団が解散。輔仁大学の宿舎で共同生活する石田と共産党軍を訪れ、残留して研究生活を続ける可能性について打診したが、その後共産党との連絡が途絶え、一九四六年六月帰国する。
- 一九四七年、東京文理科大学の講師として「中国古代伝承研究」を教える。財団法人民俗学研究所の理事として、社会科学教科書の作成事業に取り組む。
- 一九五二年、東京教育大学文学部助教授、のち教授となり、竹田且と史学方法論を担当する。九地域総合調査、「道教儀礼に関する調査」、「日韓共同民俗調査」などに参加する。
- 一九七六年、筑波大学歴史・人類学系教授、付属小学校校長となる。北見俊夫と日本民俗学を担当し、のち千葉徳爾、宮田登も加わる。「東南アジア華人社会の宗教文化に関する調査」に参加する。
- 一九八〇年末、都立大学「中国民話の会」を通して「中国民間文芸研究会」から交流の要請をうけ、白田甚五郎

らと日本口承文芸学会を代表して北京、上海を訪れる。

一九八一年、定年退職し、清泉女子大学教授となる。「わが国華人社会の宗教文化」調査に参加する。

一九九四年、死去。

2 民俗学、中国との出会い

高等師範での三年間は直江広治の人生にとって重要な意味を持っている。そこで後に彼の人生を貫く二つのテーマに出会ったのである。一つは民俗学、一つは中国であった。

一九三六年冬、『山の人生』に偶然に出会ったことは、直江が民俗学を志す直接的な契機となった。

「山の人生」という書名に惹かれてそれも借り出し、暗いスタンドの下でひもといた。読み進むにつれて、私はこういう学問の世界があったのかと、魂をゆすぶられる思いがした。その夜は閉館まで、時間の経つのも忘れて、この本をむさぼり読んだことを今に記憶している⁽⁸⁾。

その後直江は柳田の著作を多く読みあさり、民俗学を学ぶ決心を固めていった。当時の柳田は既に『山の人生』などに代表されるような「山人論」から離れ、マジヨリテイーとしての日本人を理解するための民俗学の確立に取り組んでいた。このような姿勢の変化は後に民俗学の可能性が切り捨てられたと評されているが、しかし『山の人生』に感銘を受けて民俗学に進んだ直江には、それに対して困惑や心残りなどはまったくなかった。社会的に考えれば、マジヨリテイーとしての日本人の研究は時代の要請を受けての結果であり、また日本民俗学が次第に認められ、独自の地歩を確立できた前提でもあった。

半年後の一九三七年の夏休みに、北海道での修学旅行の後、一人旅で樺太に出た直江は、盧溝橋事変のニュース

を新聞で読んだ。直江は後年、その時のショックをこう回顧している。

この事件が日本にとって、非常に重大な意味をもつことになるだろうということは若い私にも予感された。一方私は、地歴科に籍をおいて、中国の歴史について一通りの勉強はしてきたわけであるが、さて中国民衆の生活ということになると何も知らないと言ってよかつた⁹⁾。

地歴科では地理と歴史を勉強し、その中に東洋史の勉強も入っていた。中国について概論的な知識は持っているが、しかしその現実はわからないというのである。これは決して直江一人のことではないだろう。柳田は一九一七年三月の『郷土研究』四巻十二号で雑誌の休刊を宣言した後、二〇日より二ヶ月余りにわたって台湾・中華民国に旅をしていた¹⁰⁾。この記念すべき初めての海外経験の後、彼は「支那の将来は誰一人予言し得られない」¹¹⁾という感想を述べている。中国との出会いが直江にとって決定的なのは、これまで進学先として考えていた国史の代わりに、東洋史に進学したところにある。そして中国語の言語力を持つことによつて、直江の中国との関わりは、他の民俗学者と異なる形をとっていた。

しかし、直江は東洋史の勉強には熱心ではなかった。「日本民俗学の方法をしっかり身につけておかなければと思」つたからであるという¹²⁾。つまり、中国を理解する道として、書物での研究より実地調査を選んだのであり、同時にその選択は、将来中国に赴く考えがこの時期から既にあつたことを意味している。

3 民俗学の訓練

木曜会に顔を出すようになる一九三九年は、ちょうど海村調査の締めくくりの年にあたり、調査から帰つたばかりの先輩たちの報告があつて刺激的であつたと直江は回顧している¹³⁾。実は、戦争の影響やそれに伴う調査費の

支給停止で調査は続けることができず、一九三八年に既に打ち切られていた。しかし「木曜会」の会合は月に一回か二回程度柳田宅で行われていたし、そこで海村調査や新たな自主調査に関する報告や議論が行われたと思われる。

直江は四月から六月、駿河台で行われた日本民俗学講座に積極的に参加し⁽¹⁴⁾、十一月には、和歌森太郎や千葉徳爾などと、高師と文理大が一丸となった「茗溪民俗研究会」を結成し、四回まで例会を行った⁽¹⁵⁾。翌一九四〇年の春に、初めてのフィールドワークを岐阜県武儀郡の板取川の上流地方で行い、その後、飛騨の高山で江馬三枝子⁽¹⁶⁾を訪問し、調査結果を早速『民間伝承』五一八（一九四〇年五月）に「板取雑記」として発表した。

独自で調査を行い、調査結果を報告し得たのは、一人前の学者へ第一歩を踏み出したことを意味する。『民間伝承』次号（五一九、六月）を皮切りに、十月までの短い期間に、直江は書誌紹介を六本も執筆した。この中で、六一（一九四〇年十月）の「支那民俗学に関する二書」、すなわち顧頡剛の『古史弁自序』（平岡武夫訳）と林蘭の『香売りの董仙人』（呉守礼訳）⁽¹⁷⁾についての紹介が注目される。

書評紹介は「木曜会では、研究会が終ると、柳田先生がこの一ヶ月の間に読まれた本や雑誌類のうち、民俗学的価値のあるものを、『民間伝承』誌上に紹介するようにと、名指して手渡されるのが常であった⁽¹⁸⁾」というように、書誌の選定と紹介者の指定は多くの場合柳田の意思によるものであった。この二書もそうであったかどうかは定かではない。

同じく十月に、柳田は『朝鮮民俗』第三号「今村鞆翁古稀記念号」に「学問と民族結合」という一文を寄せたことは第一章でもふれたが、そこで「今まで我々はあまりにも内地の問題に没頭して居りました。又それ程にも新たに心付くやうな珍らしい事実が次々に現れて来るのであります。しかしもうそろそろ外部との比較といふことが、考へられなければならぬ時代になりました⁽¹⁹⁾」と述べてはいるものの、朝鮮の民俗の索引作成を勧めるに留まり、「二国民俗学」の枠はまだ揺るぎなかった。

それと比べると、若き直江の態度は積極的であった。彼は紹介の冒頭でこう主張している。

伸びんとするものは先づ力を内に蓄へねばならぬ。日本民俗学の現状は正にそれである。併し我々の学問が將來世界に向かつて自己を出張し得るためには隣国民俗学の成果に対して絶えざる注意を払ふ事が肝要である。

日本民俗学にとって「伸び」ることが必然な趨勢であり、その具体的な形は「世界に向かつて自己を出張」することである。かつて柳田によって「世界民俗学」という形で語られ、そして「一国民俗学」の実践の中で姿を消していた世界への寄与は再びその弟子によって語られるようになった。そして各国における「一国民俗学」の成立を待つという消極的な態度ではなく、「出張」、即ち日本民俗学の方から積極的に関与する実践的な姿勢が示されている。

この「出張」はまた中国と民俗学を選んだ直江が自分に課した任務でもあった。一九四一年「中国民間説話の民俗学的研究」を提出して大学を卒業した直江は、自ら中国行きを志望し、ちょうど北京の日本中学校から求人があり、即座に赴任することとなった⁽²⁰⁾。

2 「北支」での活躍

一九四一年七月、直江広治は日本で親しく付き合った留学生の紹介で北京市西城太平橋四八号郭宅⁽²¹⁾に下宿し、これより一九四六年六月まで五年間北京で生活していた。

到着早々直江は近況を『民間伝承』に報告しており⁽²²⁾、その後たびたび通信を寄せている(本章末の表24参照)。東京から『民間伝承』をはじめ、民俗学関係の新刊⁽²³⁾が届けられており、現地でも直江は柳田や木曜会の仲間の